

チェルノブイリ通信

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号

Tel·Fax 093(681)1780

口座番号 福岡7-65328

加入者名 チェルノブイリ支援運動・九州

1994年10月24日

No.

27



Трыумф Лукашэнкі

АДЫЛСІ ВЫБАРЫ, А ЗА ІМІ — І ПЕРШАЯ ПРЭС-КАНФЕРЭНЦІЯ з першым прэзідэнтам Рэспублікі Беларусь аляксандрам лукашэнкам.

切尔ノブイリ通信No.27号を お届けします

ようやく過ごしやすい季節となつてまいりました。あの暑かった夏、事務所での作業はまさに（痩せ）ガマン大会の様相でしたが、いまでは事務作業も快適に行なうことができます。

支援運動も今年一年の活動をしめくる総会の季節を迎えることになります。今年は11月13日（日）に開催しますので、ぜひご参加いただければと思います。（詳細は裏面参照）

今回の通信は、総会を前にこの5年間の支援運動の歩みを整理しています。また、新たに「各窓口からのごあいさつ」が登場します。各地の状況を報告してもらうというコーナーですが、これを機会に、みなさんからのご意見をどしどしお寄せ下さい。通信の内容について、事務局について、支援運動全般について、などなど何でもかまいません。よろしくお願ひします。

ベラルーシ共和国ミンスク市で、この10月3～5日に「切尔ノブイリ事故の放射線影響に関する国際シンポジウム」が開催されました。ベラルーシではこれまで、切尔ノブイリ災害の克服のために、被災者の健康の保持と強化、放射能汚染地域の住民への安全な環境の保証、社会心理的、経済的、環境面の事故の被害を最小限におしと

どめるための国家プロジェクトが取り組まれてきました。もちろんこれらのこととはベラルーシ独自では困難な事業です。今回のシンポジウムでは、ベラルーシ政府機関をはじめ、ウクライナ、ロシア、日本や欧米からも大勢の研究者が出席し、切尔ノブイリの被害と共に克服するための討議を行いました。

今中さんには、シンポジウムの報告をかねて講演をしてもらうことになっています。

今中さんには、ヤコベンコさんからのいろいろな資料をもって帰ってきてもらいました。そのなかにサナトリウムの保養効果について保健省が行った調査結果が入っていましたので、さっそく紹介します。調査作業は引き続き行われるとしながらも、「サナトリウム・キュウシュウが、健康回復の面で、このデータが予備的なものとはいえ、より明確な肯定的な効果を得ていることを指摘することができる」と、ベラルーシ保健省から大きな評価を得ていることは私たちにとっても喜ばしいことです。

本を出版します

<チェルノブイリ支援運動・九州>これまでの歩み

【1986年】 4月 チェルノブイリ原発事故発生

【1990年】 世界に向けて救援の呼びかけ始まる。

【1990年】

6月<チェルノブイリ支援運動・九州>結成される。

7月 松岡 信夫さん講演会（福岡市、飯塚市、長崎市、八代市、水俣市、鹿児島市、宮崎市、大分市、中津市、日田市、北九州市）

12月 第一次支援物資（750キロ）をウクライナに送る。

【1991年】

3月 藤田 祐幸さん講演会（長崎市、佐世保市、芦屋町、中津市、大分市、玖珠町、豊後高田町、 4月・鹿児島市）

5月 広河 隆一さん講演会（飯塚市、福岡市、北九州市、佐賀市）

6月 第一次調査団がウクライナとベラルーシを訪問。

*第二次支援物資を持参。

7月 日本で研修中のベラルーシ医師に第三次支援物資を贈呈。

10月 イーゴリ・コスティン写真展（北九州市、水巻市、飯塚市、熊本市、佐賀市、鹿児島市、大分市）実行委員会として参加。

【1992年】

4月 チェルノブイリ黙示録上映会（北九州市、福岡市、大分市、川内市、鹿児島市、中津市、日田市、唐津市、佐賀市）

9月 ベラルーシから<チェルノブイリ同盟>が来日。（福岡市、北九州市、長崎市、日田市、熊本市、水俣市、唐津市、湯布院、大分市、宮崎市、串間市）

12月 サナトリウム九州オープン。

第二次調査団がベラルーシを訪問。

*第四次支援物資を持参。

【1993年】

7月 第三次調査団がベラルーシを訪問。

*第五次支援物資を持参。

9月 ベラルーシから<子供アンサンブル>来日。

*第六次支援物資を贈呈。

【1994年】

- 1月 <チェルノブイリ支援運動・九州>の事務所オープン。
運動が広がり、会員が2000名規模になる。専従事務局員をおく。
- 6月 第四次調査団がベラルーシを訪問。
*第七次支援物資を持参。
ベラルーシから医療研修に来日。

これまで現地に送られた支援物資

【1990年】

- 12月 第一次支援物資をウクライナに送る。
*放射能測定器5台の送り先
　　オーンフスク市中央地区病院、オルブチ市、ナロジチ市衛生検査所、
　　ジトミール州保健省に2台
*1k缶粉ミルク400缶、500入りスキムミルク400箱、絵本、会員
　　から子供達へのクリスマスプレゼント多数の送り先
　　ジトミール市小児甲状腺放射線治療所、ナロジチ市中央病院、
　　セレツ村幼稚園、コロステン幼稚園、イスコロチ村幼稚園など

【1991年】

- 6月 第二次支援物資（第一次調査団が持参）
*ウクライナ共和国に届けたもの
　　放射能測定器、おもちゃ　　　　　　　・・・ナロジチ中央診療所
　　真空採血管、針1800本、粉ミルク64缶　・・・子供総合病院
　　医薬品、粉ミルク64缶、おもちゃ類　　・・・コロステン中央病院
　　心電計2台　　　　　　　　　・・・がんセンター
　　FAX1台、10万円のカンパ　・・・ビースニック新聞社移住基金へ
*ベラルーシ共和国に届けたもの
　　放射能測定器、6万円のカンパ　　・・・チェルノブイリ同盟
　　ポケット線量計　　・・・ソビエト平和財團ベラルーシ支部

【1991年】

- 6月 第三次支援物資（日本で研修中の医師に持ち帰ってもらう）
　　超音波診断装置の探触子　　・・・放射線医学科学調査研究所
　　医薬品（110万円相当）　　・・・ミンスク小児血液病センター

【1992年】

12月 第四次支援物資（第二次調査団がペラルーシに持参）

*全てミンスクの＜サナトリウム九州＞に贈呈。

超音波診断装置、サナトリウム運営資金5万ドル、

子供達へのクリスマスプレゼント（おもちゃ、絵本など）

【1993年】

7月 第五次支援物資（第三次調査団がペラルーシに持参）

*全てミンスクの＜サナトリウム九州＞に贈呈。

自動血球計数装置、血液分析器、試薬、放射能測定器、

サナトリウム運営資金2万ドル、ビタミン剤、食品など。

【1993年】

9月 第六次支援物資（子供アンサンブル一行に持ち帰ってもらう）

・血液分析器、試薬、総合ビタミン剤など、・・・モズイリ市子供病院

2m四方のパッチワーク5枚、ビタミン剤 ・・・サナトリウム九州

【1994年】

6月 第七次支援物資（第四次調査団がペラルーシに持参）

超音波診断装置SSD500一式 ・・・モズイリ市子供病院

サナトリウム運営資金5万ドル、エコーコピア、

一般検査用探触子、自動血球計数装置、

血液分析器の試薬、総合ビタミン剤など ・・・サナトリウム九州

7月 エコーコピア、エコーベリーを医療研修に来たガリーナさんに渡し、モズイリ市子供病院に持ち帰ってもらう。

4回の現地調査と報告の概要

●第一次調査団（1991年6月13日～22日）

メンバー：伊勢 泰（医師・国立病院医療センター国際医療協力部）

占部 正彦（朝日新聞佐世保支局長）、菊川 憲司（通訳）

河野 近子（別府市）、田宮 京子（福岡市）、深江 守（北九州市）

訪問先：ウクライナ共和国・・・キエフ、ジトミール市子供総合病院、チエルブイリ同盟、保健局、コロステン、ナロジチ地区、避難民の家、ビースニック新聞社、がんセンター、サナトリウム
ペラルーシ共和国・・・チェルノブイリ同盟、モギリヨフ保健局、スラップゴルド村、放射線医学センター付属病院、平和基金

感想など・切尔ノブイリの災害を乗り切るために、さまざまな摸索をしいる。
そのたくましさに圧倒される。

- ・定期的な交流の必要性を感じた。
- ・私たち（日本）に対する期待の大きさを痛感した。
- ・子供達がどんな病気にかかっているのか、それを調べる機械がほしい。病状が判明したときは、すでに手遅れになっていることが多いから・・・「100万本の注射器より医療機器がほしい。」という希望に応えたい。

* チェルノブイリの子供達に医療機器を送ろうキャンペーン開始

●第二次調査団（1992年12月6日～13日）

メンバー：村上 稔子（熊本市）、渡辺 文美（大分市）、大友 延次（東京都）
中村 隆市（北九州市）

訪問先：ミンスク・・・切尔ノブイリ同盟事務所、サナトリウム九州
小児血液病センター、ファルココルフォーズ平和基金事務所（ペ
トリヤエフ教授）、教会、切尔ノブイリの画家や映画監督と懇
談

モズイリ市・・・同盟モズイリ支部、市長、コルホーズ労組職員
ホイニキ市・・・市役所（市長、地区病院責任者、ノビツキ教授）
バブチン実験センター（切尔ノブイリ原発から30km）

感想など：サナトリウム九州のオープンセレモニーに参加し、同盟関係者や
医師、教師等の生の声を聞き、120人の子供達と接することで、
サナトリウム九州の意義を実感できた。「外国へ保養に行くには、
多額の費用がかかり、限られた子供しか行けないが、サナトリウム
九州なら、たくさんの子供たちが放射能から解放される。」「この
6年間必要だったものが、ようやくできて本当にうれしい。ベ
ラルーシ国内の非汚染地に、たくさんのサナトリウムができるこ
とを願っています」というお母さんの言葉がうれしかった。

* 今後の課題は、医療設備の充実と食事内容の改善。

●第三次調査団（1993年7月11日～21日）

メンバー：宝蔵 俊二（宮崎）、河上 雅夫（東京）、河野 近子、深江 守、
菊川憲司

訪問先：モスクワ・ミチノ墓地、ミンスク・同盟事務所、コルフォーズ
サナトリウム九州、保健局、放射線医学研究所付属病院
ゴメリ州・モズイリ市地区病院、カリンカビッチ市、ホイニキ市
地区病院、ドロニキ村（チェルノブイリから15km～20km地点）
感想など：今回持参した医療機器（自動血球計数装置、血液分析器）と前回
持参した超音波診断装置により、サナトリウム九州の診察、検査
設備は一応整った。

* 保健大臣との主な会見内容

「サナトリウムの事業は有効なものだと思います、特に医療機器
を持ってきていただきたことに感謝します。」
「今、問題になっているのは甲状腺のガンです。チェルノブイリ
事故前と比べると27倍に増加した。糖尿病や生殖腺のトラブル
も子供達に増えてきた。消化器官や循環器官の障害、免疫機能低
下による様々な症状も出ています。高度な医療機器がないため、
初期のガン発見が困難なのです。」

* 放射線医学研究所付属病院（甲状腺ガンの手術をした子供達と会う）

ナターシャ・・・ホイニキ出身14歳、再手術のため来院。
アンドレ君・・・ミンスク出身、まだ5歳になったばかり。
カーチャ・・・ゴメリ出身14歳、手術のあと成長が止まったが
2ヶ月間の治療で5センチ背が伸びた。

* ホイニキ地区病院（チェルノブイリから50kmの町）院長の話

病気になる率が約10倍になっている。心理的な問題も大きい
「森に入ってはいけない。キノコ、木の実を取ってはいけない。
川に入ってはいけない。魚を捕ってはいけない。」禁則過多。

「若い医者は、外に出ていった。医者の充足率は3分の1です」

* 放射能を恐れて野菜類を取らなくなり、ビタミン不足が病気の原因にもなっ
ている。食べても病気になり、食べなくても病気になる。

●第四次調査団（1994年6月8日～17日）

メンバー：柳楽 翼（大分協和病院院長）、秋月 初美（大分）、深江 守

訪問先：サナトリウム九州、ミンスク小児血液病センター、放射線医学
研究所付属病院、モズイリ市小児病院、ナローブリヤ市立病院

感想など：国際ボランティア活動に参加したのは今回が初めてだったが市民
のカンパを集めるとそれが数十倍もの金銭価値を持つことを実体

験できた。日本に十人、二十人連れてきて保養させるのに比べたら、サナトリウム九州は、はるかにすごい発想だと思う。そういうことを市民団体が作り出したということに感激した。

*事故後に生まれた子供達は、学校での集中力が弱く、風邪を引きやすく、殆どの子供は、2~3の慢性病を持っているという。事故後8年経つが、子供達にとっては、今まさに病気との闘いがくり広げられている。

*子供達の体は少しずつ少しずつ放射能にむしばまれ続けている。
<サナトリウム九州>のような転地療養施設は、ますますその重要性を増していることを改めて実感した。もっともっとたくさんのサナトリウムがベラルーシの非汚染地区に生まれることを願う。

まとめにかえて

<チェルノブイリ支援運動・九州>は、チェルノブイリ原発事故の被害に苦しむ人々、特に子供たちを、一人でも多く救いたい、という気持ちから生まれました。しかし、援助物資を送るにも、何を、何処に、どんな方法で送ればよいのか、自分たちに何ができるのか、といったことも判らずに手探りの状態からスタートしました。

初めは、チェルノブイリ現地を訪問した松岡さんや藤田さんからアドバイスを頂いたり、全国各地にできた「救援グループ」から情報を得て、ようやくウクライナ共和国のビースニック新聞社を通じて放射能汚染地に支援物資を送ることができました。しかしこの時は、クリスマスから新年を迎える時期と重なったこともあり、送った支援物資がモスクワ空港で2ヶ月間行方不明になるなどモノだけを送ることの難しさを知りました。また、単にモノだけを送るという支援では長続きしないという想いもあり、より有効な支援をするために、専門医も含めた医療調査団を派遣しました。その後も毎年、現地を訪問し、逆にベラルーシからも毎年来日するなどお互いの<顔の見える関係>ができてきました。

92年の<チェルノブイリ同盟>の来日では、子供達のために、放射能汚染地からの転地療養施設（サナトリウム九州）を非汚染地のミンスク郊外に作り、共同で運営することに合意しました。それは<支援運動・九州>が運営資金の一部として毎年5万ドルを3年間提供するというものでした。（3年後に見直しを行う）

「私たちにそれだけの力量があるだろうか」という不安は、誰もが持っていたようです。しかし、「切尔ノブイリの子供達には転地療養施設が必要だ」という想いが勝りました。（メンバーの何人かは、カンパが集まらない場合は、私財を投げ売る覚悟だったようです）

93年の子供アンサンブル公演では、直前になって来日グループが変わったり、様々な面で不手際が重なり、九州各地の関係者に多大なご迷惑をおかけしましたが、パレスカヤ・ゾーラチカの九州・山口公演及び交流は、結果的には大きな反響を呼びました。特に子供達どうしの交流からは、今までになかった動きが出てきました。長崎県の長与北小学校では、「私たちの小学校では、サナトリウム九州のことをコンサートを通して知った一人の子が、学校全体の問題として提案し、募金活動を行うことになりました。その際、子供達から、お金だけより手紙もそえようという意見が出て、寄せ書きや手紙を書くことになりました。日本語で書いてあるので言葉は通じないかもしれません、気持ちは伝わると思います。是非、サナトリウムにいる子供たちに渡してほしいと思います。 長与北小学校児童会代表 植木良隆」

こうした取り組みを進めていく中で、会員も順調に増えて2000人規模の団体になりました。今年1月からは、ようやく深江事務局長の自宅から独立して、事務所を持ち、専従事務局員もおけるようになりました。しかし、放射能の寿命と被害の広がりを考えれば、支援運動はまだ始まったばかりで、これからが本番だといえるでしょう。

来月の第4回総会に向けて、これまでの4年半を振り返ってみましたが、評価の仕方は様々だと思います。

要望、提案、思いつき等ありましたら、どしどし御意見お寄せください。

(中村)

総会に出席される際は、この通信をご持参ください。総会の資料となります。

また、通信を提示していただくと、記念講演が無料となります。



私たちの涙で雪だるまが溶けた

イーゴリ・マローズ(男)
第4中学校11年生
シェクローバ町

おばあちゃんの住むマリノフカは汚染のひどいところだとは、誰も知らなかった。そこは野生のナシの木があった。何歳かは誰も知らない。それはおばあちゃんの庭にはえていた。

その夏、マリノフカの人は、誰も、恐ろしい不幸、すでに村に舞い降りていた放射能について予測していなかった。誰も、この古い大木が被爆しているとは思ってもいなかった。その木は、庭のほとんど3分の1を日陰にする。

何度も、村の人達は、この木を切り倒すよう、おばあちゃんに助言した。おばあちゃんは断って、こう言った。「そうしちゃ、ダメなんだよ。その昔、この木の下に、罪のない女の子の血が、流されたんだから。」と。

悲しい奴隸の死の伝説は、多くの人が知っていた。しかし、みんなが信じていたわけではない。おばあちゃんは信じていた。おばあちゃんにとっては聖地なのである。

僕のいとこのナデージダはこのナシが好きだった。その年の夏休みにも彼女はおばあちゃんのところにやってきた。その年、町は蒸し暑く、沈んだ雰囲気だった。ナデージダは夏中、おば

あちゃんの菜園に行き、種蒔きなどの手伝いをした。彼女は森へ行き、いちごやキノコを集め、近くの川で日光浴や水遊びをした。地区のえらい人が来た。「村の土や水や空気はとてもきれいである。ここは安心して住める。」と言って帰って行った。村人は住み続けた。

大きく葉を茂らせたナシの木の下で、ナデージダは水彩画をかいた。彼女は美術スタジオで勉強していた。彼女は画家になりたかった。そのいとこはその夏、とても美しくなった。15歳になった。彼女は日記を書き始めた。そこに秘密の考え、印象を書き残した。この日記には、腫瘍専門病院での苦しみが書かれることになる。彼女の日記は、言葉で言い表せないほど、僕を振り動かした。とりわけ、最後の10日間はそうである。何という希望、生への渴望、人間的な尊厳なのだろうか。何という悲劇。何といいうやすことのできない苦痛の印象なのか。今、この日記は僕の手元にある。僕はこの勇気と真の崇高さが記されたナデージダの日記の最後の数日を紹介する。

3月1日

第12号病室の男の子たちが、春が来ても不幸な私や私の病室の子たちに

春のお祝いを言いにやってきた。通りにはまだ雪が残っていた。彼らは雪だるまをつくり、病院の大きなお盆にのせて、私たちの病棟に持ってきてくれた。雪だるまはすばらしかった。私は誰がそれをつくったか知っている。トーリヤだ。彼は彫刻家を夢みている。いつも彼は粘土で何かを作っている。今日はじめて、彼は化学治療のあと、ベッドから起きることを許されたばかりだ。トーリヤは、「春がはじまった。何かをしなくっちゃ」とようやく起き上がったのだ。その雪だるまのそばにはメッセージがあった。「女の子たちへ。皆さんの最後の雪です！」と。

雪だるまは少しずつ溶けた。それは私たちの涙に思えた。

3月29日

今日、おばあちゃんがやってきた。私の大好きな、大切なおばあちゃんだ。彼女は私の病気の原因は自分にあると思っている。私はおばあちゃんが大きなナシの木の伝説を話してくれるよう頼んだ。私はその伝説で空想するのが好きだった。それは、切尔ノブイリ事故のあとは小さな原子炉になったみたいだった。

私はおばあちゃんの話を小さいところまで漏らさないように聞いた。それを絵にするためだ。おばあちゃんは静かに話した。私の心はおだやかになつていった。

「昔々、農奴制の頃でした。貧しい

が美しい娘を、金持ちの領主が好きになつてしましました。力づくで、娘を城に連れてきました。しかし、マリイカは、この娘の名前ですが、ずっと、城の中で泣き、悲しんでいました。ある日、この悲しい娘は、若い番人の手助けで、彼と一緒に、領主のもとから逃げました。領主の兵隊は何も隠れるところのない草原に彼らを追い詰めました。無慈悲な領主は激怒して、叫んだ。『お前が俺のものにならないというのなら、誰のものでもなくしてやる』と。領主はサーベルで娘に切りつけた。娘は大地に崩れさつた。罪のないマリイカの血が流れたところに、美しい野生のナシの木が生えました。これが私がナシの木を守ってきた理由なのよ。今はね、ナデージダちゃん、もうこのナシの木はなくなってしまったの。変なクレーン車が来て、このナシの木を根っこから引き抜いてしまったの。ナシの木があったところには、セメントが流し込まれ、何かのマークをつけていったの。村からみんな出ていってしまったの。マリノフカは、今は、空っぽになってしまったの。死んでしまったの。」

おばあちゃんが帰るときに、私は頼みたかったことがあった。私が死んだら、私を墓地に埋めないで欲しい。私はそれが心配だ。草原か白樺林がいい。私の墓のそばにはリンゴかナシの木を植えて欲しい。いやだ！草にはなりたくない。私は生きなければならない。私は生き続ける。私には恐ろしい病気

に打ち勝つ力が充分にある。私はそう感じた。

3月3日

私は出来るだけ痛みをこらえている。おばあちゃんの肖像画が完成した。母が来て、この絵を見て、感動してくれた。「ナデージダ、お前にはすばらしい才能があるんだねー」と言ってくれた。主治医のタチアナ先生は、私が勇気があり、私の治療も成功したと言った。私は元気づけられた。神様。お祈りします。私に持ちこたえ、生き続ける力をお与え下さい。お願ひします。

3月4日

医者はよくなっているというのに、どうして弱くなったのだろう。どうして病棟がさわがしくなったのだろう。点滴のあと、日記をついている。よくならないのだろうか。同じ病棟の友達、ガーリヤ、ビーカ、ジーマは私を見るとき、悲しい目をする。彼女たちは私に今まで以上に同情している。彼女たちも私と同じ境遇なのに。分かった。誰も人間の苦悩を見たくないからだ。だがどうしようもない。私のいる病棟は満員になっている。タチアナ先生の話では、3年前には、病院はほとんど入院患者はいなかったそうだ。この不幸をもたらした犯人をここに連れて来て、この病棟にしばらくいさせたいものだ。自分の事業の結果を見せつけたい。

アンナ・マフマートバを読み始めた。「私は最後のときを生きている」というテーマで絵を描きたくなつた。

3月5日

ワニヤちゃんが死んだ。青い目をした金髪の男の子で、私たちの病棟のみんなから愛されていた。まだ、7歳だった。彼は病院から送られて、ドイツに治療に行ったこともある。昨日、ワニヤちゃんは自分の誕生日のお祝いに私たち全員にキャラメルを配った。私たちは彼のお祝いにいった。ワニヤちゃんはとても喜んでいたのに。神様。あなたは私たちみんなに平等に親切ではないのですか。ワニヤちゃんがどうしたというのですか。何の罪もないのに。

3月6日

私はあらゆる痛みを我慢できるようになった。母がその方法を教えた。私は病院の入り口に母親たちの姿を張り付けるように考えることにした。彼女たちは、私たちより苦しんでいる。彼女たちは我慢することを教え、私たちが失望しないよう教えている。私は私の不幸を共にする仲間がいかに痛みと闘っているかを見たことがある。それは15歳のボーバだ。彼の母親は医者のところに走り、医者は痛み止めの注射をする。苦しんでいたが、うめきは止まり、泣くのもやめた。それが効く

あいだはいいが。

このあと、彼はどうなるのだろう。私たちはどうなるのだろう。わたしが思うには、切尔ノブイリは、人間の認識に従わないものの一つである。これは人間の存在の合理性をおびやかし、その信頼を失わせることを余儀なくさせるものにほかならない。

3月8日

今日、オランダの人道支援組織の人々が病院に来た。病室に、ふさふさした金髪の女性が入ってきた。とても美しく、魅力的な人だった。私のそばに座り、私の頭をなでた。彼女の目に涙があふれてきた。通訳の人が話してくれたところでは、数年前、彼女のひとり娘が交通事故で突然なくなったそうである。外国のお客さんは、身につけていた十字架についたネックレスをはずし、私の首にかけてくれた。私は、子どもにたいする純粋な愛は世界中の母親はみな同じであることを感じた。

3月8日

今日は祝日。机には、オレンジ、バナナ、アカシアの花束が置いてある。それに詩がかいてある美しい絵はがきもある。

望みは何かというと
あなたがよくなりますように
あなたに太陽が輝きますように

あなたの心が愛されますように
あなたのすべての災難と不幸が
勝利にかわりますように
私たちはいつも健康と幸福を望んで
いる。ただ勝利だけだ。
恐ろしい病気に打ち勝とう。幸福は
あなたのものだ。

病院の講堂で国際婦人デーの集会が開かれた。私はトーリヤと一緒に踊った。すこしだけ。目がまわりはじめるからだ。私たちは美しいペアだ、と、ともだちは言ってくれた。

3月9日

おとぎ話は終わった。私は悪くなつた。こんなことは今までなかった。朝から、虚脱感がひどい。けいれんは止まらない。薬はもう効かなくなつた。最も恐ろしいことは、髪だ。髪が束で抜ける。私のあたまからなくなっていく。

回診の時、タチアナ先生は、私の治療は完了したので、自宅で体力を回復させることにしたと言つた。私はすべてこのことを理解した。

3月10日

母は私の好きなコートを持ってきてくれた。それを着ても、私はちっとも美しくない。私はやっと歩いて、病棟のみんなにわかれを告げてまわつた。さようなら、みんな！私をわすれない

でね！私はみんなのことをわすれないから！

ナジェージダは3月の終わりに死んだ。日記の最後はラテン語の言葉「Vi xi（生きた）」で結んでいた。彼女は、彼女の人生で何ができたのだろう。彼女は何を残したのだろうか。何枚かの風景画とスケッチと肖像画だった。それと大地に残った輝かしい足跡だった。

Chernobyl は私たちの世界観、ものの見方の一指標になってしまった。それは地球上における人間の存在の否定を余儀なくさせている。われわれは、われわれが失っているものを何も感じないのか。それは生命の樹自体に危険性があるのだ。ではどこにその源があるのか。僕が説明してみよう。僕にとっての源とは、小さいワーニャであり、ボーバであり、ナジェージダである。我慢できない痛みで傷つけられているいたいけな子供たちなのだ。みなさん、神も、悪魔もいらない。人間の理性とやさしい心だけが、病み、苦しみ抜いている大地を救うことができるのです。みんなで一緒になって初めて、Chernobyl の恐ろしい被害を克服することができるのである。

子ども達の作文集製作プロジェクトへのご参加をお待ちしています

@★ 今回から登場した各地の窓口からのご挨拶のコーナーです。どういう原稿が来るか楽しみにしていましたが、ご覧のような内容になっています。ニギヤカなコーナーにしていきたいと思っていますので、どしどし原稿をお寄せいただきたいと思います。

原稿を書いた人のどういう人か分かるように紹介文を載せた方がいいのではないかという意見もありましたが、長くなるのでやめます。性別だけ紹介します。宮地さんと沢村さんは女性で、地蔵原さんと松本さんは男性です。年齢は30代、40代、50代ということになっています。だれが当てはまるかはご想像におまかせします。ということで、みなさんからのご挨拶です。

【鹿児島市 宮路慶子】

Chernobyl 支援コーヒーの販売を本格的に始めて3年。最初の年は、遠く沖縄、大阪、埼玉、山口へも発送するほどの勢いで、冗談で書っていた年間目標50万円に迫る益金を得た。

（某パブのお歳暮まで、無料配達を条件に引き受け「来年もよろしく…」と、愛想を振りまき回った…ちょっとだけ心配した『お歳暮を届けてくれたあのこ』という指名は遂にこなかったが。）ただ、その後売上は順調に落ち、今や細々商い中…と言ったところ。でもって、これを一人でやっているという現実。一人でやってこれだけやりやあ大したもんヨとなぐさめつつ、運動と一緒にやって行こうという人が現われな

いのは深刻な課題。川内原発増設の動きが活発化するなかで、ほとんど反対の動きがない鹿児島でましてや Chernobyl。アーバワーが欲しいと叫ぶこの頃です。

《3年間で益金70万円。多いか、少ないか。中村さん、いつも送金遅れてごめんです。》

【福築町 地蔵原 満】

「各地の活動を報告するコーナーを作りましたので、報告をお願いします。」と鶴田さんから言われて、ハタ?と思ってしまいました。「あつ、そうだ、Chernobyl支援の筑豊連絡所だったんだ…」と思い出しました。

この程度の認識ですから、ほとんど活動らしいことはやっていません。活動らしいことと言えば、『もんじゅをとめよう』100万人署名ぐらいです。20~30分ほどの時間をもらって、もんじゅの危険性、非経済性等の説明をした後、もんじゅのビデオを渡し、「よろしければご近所の方と見てください」と言います。同様に署名用紙も渡します。

日本ではChernobylのようなことはおきない…と思っている人も多いけど、おきてからでは遅いんだよね、と考えての署名集めです。

Chernobyl支援で活動されている皆さん。じっくりと原子力発電についての危険性について学習されはどうでしょうか。

【八代市 松本 秀美】

やつとなんとか秋がきました。家の周り田園に囲まれ、夏の間、朝夕の農薬散布に生活を脅かされていました。今年は、早越で虫の発生が少ないとばかりわらず、不必要的駆除作業があまりにも多すぎたのです。

実は、活動資金やカンパ等を貯う為に株式に手を墜しているのですが、あまりうまくいきません。平均購入価格440円で6000株西部ガスを仕入れましたが、現在400円を割っています。無償増資600株分を入れても赤字です。目標は、年20万円の純利益でした。期待しないで、待っていてください。

8月に清水満さんに誘われて、デンマークに行つきました。色々と考える材料を仕入れてきたのですが処理伝達能力がなく、もどかしい思いをしています。

仕事は水道局の経理、苦情、雑用をしています。全職員数は約25名です。

名前ばかりの地方自治体、通称、一般会計は社会主義型単年度会計ですが、企業局(特別会計)は、改良型資本主義会計です。収益と費用のバランスを崩さないように料金と工事量を設定して、現在、将来の公平負担をいつも考えています。当然、一般会計からの繰入金は、消火栓等の特殊な場合を除いて、原則禁止です。首長や議会の選挙目当ての政策に縛りをかけているのです。理想は高く、制度上もユニークな

働きがいのある仕事ですが、左遷と思って来るトップばかりで8年間に5人変わりました。あまりのバカバカシサにいつも喧嘩を売っています。

八代の場合、地下水を水源として水量には、一応、問題が無いため今年は增收増益で又断水とも無縁です。

家では、柑橘類を10アール程作っています。

【下関市 沢村和世】

この10月、宇部の女性グループが、ウクライナからチェルノブイリの子どもたちを4人、4週間、転地療養のため招いています。この焼石に水のような人數でさえ、迎え入れるには、何ヶ月も前から準備し、沢山の費用と労力が必要でしょう。

その点『スヴィスロッチ河畔の九州（編集部注「サナトリウム・九州」の現地での呼称）』は、当事国の中で非汚染地区にサナトリウムを作り、常時200人の子どもたちを3週間交替でみるという、とても合理的な方法だと思います。

しかしこの方法は支援者からすると、子どもたちに直接会えないという、物足りなさがありますね。

いずれにしても、チェルノブイリの子どもたちの救援運動にかかわることで、自分は、人助けという良い行いをしていると自己満足しているだけではいけないな、と思っています。

チェルノブイリはいつ日本に再現されるかもしれません。救援運動と、核廃

絶、反原発の願いは一つにつながっているものだと思っています。

チエルノブイリ調査報告 NO.2

ミンスクでの調査を終え、六月一三日からモズィリ市へと移動し、チェルノブイリから一〇〇キロ圏、五〇キロ圏、三〇キロ圏と汚染地区での調査活動を行なうことになる。モズィリ市ではパレスカヤ・ゾーラチカの子ども達が出迎えてくれ、歓迎のコンサートも開いてくれた。また、従来の学校教育システムに社会（環境）教師というシステムを導入し、環境教育、文化、健康という新しい学校システムを追求している第一三学校も訪づれた。社会教師というシステムは次年度からの導入で、今は準備期ということであったが、地域の母親たちが社会教師として、子ども達にさまざまな地域の文化、芸術を教えるようになるそうだ。また、子ども達の方は、自分で好きなクラス、教師を自由に選ぶことが出来るようになるという。学校見学の印象では、今でも十分自由な雰囲気で日本の学校からしたら全くうらやましい限りであったのが。

この学校の副長（教頭）をしているレオニックさんから事故の時の話を聞くことができた。事故の時、そう一九八六年四月二六日、たまたま家族を連れてプリチャチの町へ出かけ、六時間もそこに居たそうだ。

『とても暑い日だった。何が起こっ

たかだれも知らない。軍人がとても多く、「どうしたのか?」と聞いたら「訓練さ」と言っていた。雲もなかつたのに突然雨が降ってきた。原発のある方角の空の色が少し変だったが、それだけです。数時間過ごしてから自分の車で帰った。パニックがあったが、だれも正確には何もわからなかった。息子はいま一八才だがずっと病気です。ときどき夜起きて、頭が痛い、心臓が痛いという。病院に連れていっても病気ではないと言われるが、健康でもない。妻も同じ症状だ。ときどきあちこちが痛みだす。彼女も教師で、とても健康な人だったが、最近は調子が悪い。検査のためにミンスクに連れていく。この前も行ってきた。血液検査は悪くないのだが、調子が悪い』。

『あの日はとても暑い日だったので雨が降って喜んだんだ。口のなかに金属の味がして、ノドがとても乾いたのを覚えている。ブリチャチの町はとてもきれいな町だった。とても残念だ』。

奥さんの兄さんは軍人で、除染作業に従事したディクビダートルと呼ばれる人々だが、昨年、四五才で亡くなつたそうだ。『最後は身体障害者になつたが、なんの病気でなくなつたかは分からぬ』といふ。

モズィリ市子供病院

モズィリ市はチェルノブイリから一〇〇キロ圏にある人口一〇万五千人の町である。そのうち十四才以下の子どもは二万七千人。小児科は子供病院の

他に二つの診療所がある。子供病院は一九六一年に建てられた古い建物で一三〇床のベッドをもつ病院である。六十人の医師と二〇〇人の看護婦が働いており、一日の外来は約二四〇人。新しく三〇〇床のベッドを持つ病院を建設中で、この病院ができると全ボレシェ地区から子ども達を受け入れることになるという。

子ども達の健康状態について話を聞いてみた。

『甲状腺異常については以前から多かった。原因はヨード不足です。しかし、事故後はそれ以上に増えてきた。原因は二つあります。一つはヨード不足。もう一つは事故の影響です。甲状腺ガンは九〇年以前は一つのケースもなかったが、九三年には八人の子ども達にガンが見つかった。この子ども達は事故の時四才から五才でした。甲状腺肥大は二五%の子ども達に見られます。一〇から一四才の子どもの場合は八〇%にもなります。異常を診断するにはエコーが必要ですが、今までなかった。今日あなたたちが持ってきてくださいました。ありがとう』。

白血病は発生率は事故前に比べると倍になっており、不思議なことに糖尿病が増えており、これは事故の影響としか考えられないと言っていた。

胃潰瘍をはじめとした潰瘍が増えたのは内視鏡を使うなど検査方法が変わったためではないかと聞いたところ、レニングラードには以前から内視鏡があるが、こういう問題はないというこ

とであった。甲状腺機能低下、停止、高揚の割合は、二五%の子ども達に肥大が見られ、二〇%の子どもに機能低下が見られるという。そしてこれまでにモズィリ市だけで子どもの甲状腺ガンが八人、陽性腫瘍が五人、橋本病三〇人……。

地図にない町、ナローブリヤ

六月十四日は切尔ノブイリから五十キロ圏にあるナローブリヤ市と無人の町となった三十キロ圏のチェシコフ村を訪ねた。案内をしてくれたのはナローブリヤ市立病院長のアダムさんである。かれは地区の保健局長もかねていた。

ナローブリヤ市は町の半分くらいが三十キロ、四十キロゾーンの中にあり、町全体を移住させる計画があったそうで、そのために『この町の名前は地図にはないでしょう』とアダムさん。しかし三年にわたって結論を出すことができずに今に至っているという。

『この町には七五の村があったが、これまでに三一の村が無くなった。二万八千人いた住民も一万三千人になった。子ども達もまだ二一〇八人残っている。残っている者たちは皆慣れてきた。何でもいいや、と思うようになった。特に老人たちだ。放射能測定器があつても今ではだれも計らない。でも残っている子ども達のことが心配だ。いま残っている人たちは移住したくてできない人たちなのだ。ある人は行き先がない。ある人は仕事がない。そ

んなに自由にはできないんだ。それでも病気になれば優先的に移住できる。子どものうち八〇〇人は幼稚園の子ども達だが状態が良くない。風邪が吹けばプルトニウムが心配だ（舞い上がってしまう）。原発は動いている。石棺にはキズがたくさんある。新しい石棺を造るのは不可能だ。原発は止めるべきなんだ。切尔ノブイリに原発が建設中の時は皆うれしかった。プリチャチには何でもあった。それが…。』

この町は町全体が汚染地帯といつていい。町のあちこちにホットスポットが点在する。町全体の汚染値もモズィリ市の三倍くらいになる。それでもここで暮らす人々はここで採れたものを食べるしかない。

『ミルク、野菜など七十%はここで採れたものだ。余所から入ってきた食べ物もいっぱいあるがとても高い。牛乳は悪い。肉もそうだ。鳥肉はそんなに汚染されていない』。

この町で甲状腺ガンになった子どもは六人になる。また、今年の五月には三十人の子ども達をミンスクの放射線医学センター付属病院に送ったという。ドイツから来た医者が子ども達を検診したところ、内部被爆が高かったのだ。尿のなかから多くのストロンチウムやセシウムが検出された。一二五人はイタリアに行くという。

切尔ノブイリ原発事故から九年。子ども達の体は少しづつ少しづつ放射能にむしばまれ続けている。

(深江)

記念講演

チェルノブイリ 事故

その被害 克服の道

11/13(日)

ところ 北九州市商工貿易会館6F
[北九州市小倉北区古船場1-35]
☎(093)541-2184

■ 第1部 記念講演

とき 14:00~15:30

講師 今中 哲二

(京都大学原子炉実験所)

「チェルノブイリ事故、

その被害、克服の道」

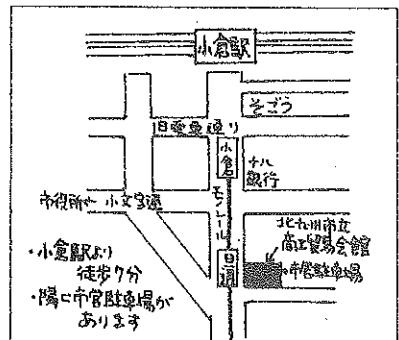
今回は、「支援運動・九州」の総会に先立ち、10月にベラルーシ共和国の首都ミンスク市で開かれた『チェルノブイリ事故の放射線影響に関する国際シンポジウム』に参加された今中さんに記念講演をしていただくことになりました。今中さんは、チェルノブイリ事故直後から現地を訪れ、放射能の汚染状況を調査しています。

*会場では、支援運動・九州の現地調査団がこれまでに撮影した写真のパネルを展示します。

■ 第2部 第5回総会

とき 15:45~17:30

・総会終了後、場所を変えて交流会を行ないます。



★ 記念講演の参加費 / 500円 (会員及び、通信をご持参の方は無料です)

チエルノブイリ支援運動・九州

880 北九州市八幡東区春の町1-3-7 日開荘2号
チエルノブイリ支援運動・九州 事務局 (093-6811780)